履　歴　書

令和5年9月21日現在

ふりがな	あざい　ごう　　すうげんいん	男・女
氏　　名	浅井 江　　（崇源院）	
生年月日	永禄13 年生まれ	

ふりがな　とうきょうとみなとくしばこうえん　　ぞうじょうじ	電話　03-3432-1431
現住所（〒　　－　　） 東京都港区芝公園4-7-35　　増上寺	E-mail
ふりがな	電話
連絡先（〒　　－　　）（現住所以外に連絡を希望する場合のみ記入） 黄泉の国	E-mail

西暦	和暦	歴
1573	天正元年	北近江の小谷城で浅井長政とお市の方の三女として生まれる
1573	天正元年	織田信長の弟信包の居城に母お市と長女 茶々、次女 初とともに引き取られる。
1582	天正10年	母お市が柴田勝家と再嫁し、長女 茶々、次女 初とともに越前北之庄城へ転居
1583	天正11年	賤ヶ岳の戦いの後、長女茶々、次女 初とともに秀吉に引き取られる
1584	天正12年	佐治一成の正室となる
1586	天正14年	この頃豊臣秀勝に再嫁して正室となる
1592	文禄元年	
1595	文禄4年	徳川秀忠に再嫁して正室となる
1614	慶長19年	大坂冬の陣の際に、大坂城に入って織田有楽斎と共に和睦を模索、徳川勢の阿茶局と交渉して和議に尽力
1615	慶長20年	「大坂夏の陣」で、再び豊臣家と徳川家が対立。 大坂城は落城。姉・茶々は自害。
1616	元和 2年	徳川家康死亡により、夫の徳川秀忠が江戸幕府二代将軍に就任
		徳川秀忠との間にもうけた2男5女の一人は、のちに第3代将軍となる徳川家光
1626	寛永 3年	64才で江戸にて永眠

増上寺にお江の本墓と霊廟がありました。しかし、昭和20年3月の東京大空襲で失われ、現在は増上寺境内に新たにできた徳川家墓所の　宝塔に、夫・秀忠とともに合祀されています。
また、一方でお江に愛された忠長は、高野山の奥の院に五輪塔の墓を建立しています。
さらにもうひとつ、お江の墓が京都左京区の金戒光明寺にあります。造ったのは何と、竹千代（家光）一筋に生き、お江と対立したお福（春日局）です。

浅井　江　について

「お江」のちの「崇源院」は、1573 年（天正元年）に戦国大名「浅井長政」と、「織田信長」の妹である「お市」との間に三女として誕生。

当時、浅井長政と織田信長は、同盟を結んでいて平穏な日々が流れていました。。

ところが、お江が生まれた 1573 年(天正元年)に、織田信長・徳川家康連合が浅井氏の「小谷城」を攻撃。戦いに敗れた浅井長政は、自害しました。

お江は、生まれてまだ 0 歳で父親の顔を覚えることもなく、永遠の別れを迎えることになってしまったのです。

母のお市は、三姉妹を連れてお城を脱出し、兄の織田信長に保護されました。

2 人目の父と、母を失う

当時、強い権力を持っていた織田家でしたが、1582 年（天正 10 年）に「本能寺の変」で織田信長が自害。織田信長の嫡子である「織田信忠」も切腹してこの世を去ったため、織田家の後継者や領地をどうするか、決める必要がありました。

そこで開催されることになったのが、「清洲会議」です。清洲会議によって、お市が「柴田勝家」と再婚することになり、お江を含めた三姉妹は越前北ノ庄に移ります。

2 人目の父親ができ、一安心と思ったのも束の間、翌年 1583 年（天正 11 年）に起こった「賤ヶ岳の戦い」で 2 度目の落城を経験することになりました。

北の庄になんとか逃げ帰った柴田勝家は、部下たちも一緒に自害するというのを思いとどまるよう説得し、他の武将への再就職を促しました。最後の宴と称し、宴会を開いたが、悲しみの宴ではなくあたかも合格祝いや婚礼祝いなどの楽しい宴だったとか・・

柴田勝家が北ノ庄城で自害した際に読んだ辞世の句「**夏の夜の 夢路はかなき あとの名を 雲井にあげよ 山ほととぎす**」は、名言となりました。

現代語に訳すと、「夏の夜のように、はかなくも過ぎ去ったわが人生。ほととぎすよ、私の名を後世まで伝えておくれ」といった内容です。

また、柴田勝家と共に自害した妻・お市の方の辞世の句も遺されています。

「さらぬだに うちぬるほども 夏の夜の 夢路をさそふ ほととぎすかな」意味は、「寝ているはずの夏の夜に、死後の世界から来たと言われている鳥・ほととぎすが、この世に別れを告げているようだ」といった内容となっています。

柴田勝家とお市は、夫婦揃って自害。幼い三姉妹だけが取り残され、賤ヶ岳の戦いで勝利を収めた「豊臣秀吉」に保護されます。

結婚に関しては、豊臣秀吉に何度も振り回されます。

豊臣秀吉激怒で幕を閉じた 1 回目の結婚

両親を失ったお江は、豊臣秀吉の養女となりました。織田信長が築き上げてきた権力を継承し、政権を強めていった豊臣秀吉のもとに迎えられたため、安定した生活を約束されたと言えます。しかし、現実はそんなに甘くはありません。豊臣政権を強めるため、お江は豊臣秀吉にいいように利用され続けるのです。

1 回目の結婚相手は、尾張大野城主の「佐治一成」です。佐治一成の母は、織田信長とお市の妹であるため、お江にとっては従兄弟にあたります。この結婚を命じたのは、豊臣秀吉であるとする説の他、織田信雄であるとの説など諸説あり、明確になってはいません。
お江にとって初めての結婚となりましたが、残念ながら長くは続きませんでした。
そのきっかけとなったのが、1584 年（天正 12 年）に起こった「小牧・長久手の戦い」です。豊臣陣営と織田・徳川陣営がぶつかった戦いで、豊臣秀吉と徳川家康は火花を散らす対立関係にありました。そんな状況下にもかかわらず佐治一成は、徳川家康が戦いを終えて三河に帰国する際、船を提供してしまったのです。
もちろん、豊臣秀吉は佐治一成の行ないに激怒。お江の姉である茶々が病気と言って無理矢理お江を召還し、そのまま強制的に離婚の流れに持って行ったと言われています。
この一件が離婚の原因という説が有力視されていますが、なかには小牧・長久手の戦いで没落した佐治一成を、豊臣秀吉が見限ったから離婚させた説もあるとのことで真相は未だ分かりません。

豊臣秀吉の意向で決まった 2 回目の結婚

豊臣秀吉の都合で佐治一成と離婚させられたお江。次は、1585 年（天正 13 年）に、豊臣秀吉の甥「羽柴小吉秀勝」と結婚することになります。このとき、お江はまだ 12 歳でした。
そして、お江は羽柴秀勝との間に娘「完子」を授かります。のちに、たくさんの子宝に恵まれることになるお江ですが、完子はお江を母にした最初の子となりました。

3度目の正直で徳川秀忠と結婚

小牧・長久手の戦いの頃は、険悪な関係だった豊臣秀吉と徳川家康ですが、講和した以上いつまでも火花を散らす訳にはいきません。また、豊臣秀吉が天下統一を成し遂げるためには、徳川家康を臣従させる必要があったため、あの手この手で徳川家康に揺さぶりをかけます。

そんな豊臣秀吉が自分の母親を人質として差し出してくるに至っては、徳川家康もとうとう折れ、徳川家は豊臣家に従うことになったのです。さらに、天下統一が手に届くところまで来た豊臣秀吉には、別の企みもありました。

それは、お江を利用した政略結婚です。豊臣秀吉の側室となったお江の姉・茶々は、豊臣秀吉との間に「豊臣秀頼」を授かりました。そして豊臣秀吉は、お江に対して「女の子が生まれたら豊臣秀頼に娶らせよ」と言って徳川家に嫁がせます。

相手は「徳川秀忠」で、徳川家康の嫡子です。

つまり、徳川秀忠と結婚して授かった娘を豊臣秀頼と結婚させられれば、徳川家を丸々取り込めることになるのです。

お江の結婚は、3回すべて豊臣秀吉の駒としていいように利用されただけでした。

お江が徳川秀忠のもとに嫁ぐ際、彼女は娘の完子を連れて行きたいと願います。しかし、それを許さなかった豊臣秀吉は母娘を引き離し、茶々に養育させることにしました。こうして大切な娘まで奪われ、お江はひとり徳川家へと足を踏み入れたのです。

子宝に恵まれ権力を強める

豊臣秀吉に利用され続け、不運な道を歩むお江ですが、徳川家に嫁ぐと状況が一変します。

1595年（文禄4年）に徳川秀忠と結婚してから3年後に豊臣秀吉が亡くなると、豊臣内部で対立が起こり関ヶ原の戦いが起こります。

関ヶ原の戦いは、豊臣家の配下にある有力者達の内部対立が原因と言われています。まず行動を起こしたのは、仕方なく豊臣秀吉に臣従していた徳川家康でした。そして、もうひとり戦いの筆頭となったのが石田三成です。

石田三成は、豊臣秀吉への忠誠心が強くべったりの所が強くあったため、、石田三成を嫌う有力者も多く、彼らは徳川家康陣営に加わります。関ヶ原の戦いは、徳川家康の東軍と石田三成

の西軍の戦いとなったのです。
結果として徳川家康が勝利を収め、徳川家は一気に勢力を拡大させていきました。

この勝利は徳川家に嫁いだお江にとっても喜ばしいことで、お江の人生もこの戦いを契機に好転します。徳川秀忠の正室だったお江は、江戸城の女主人として権力を握りました。そして、再婚してから 2 男 5 女、計 7 人の子宝に恵まれたのです。
特に注目すべきは、嫡子の徳川家光。彼はのちに、江戸幕府 3 代征夷大将軍となりますが、徳川家将軍の生母となった正室はお江だけと言われています。

お江の波乱万丈な人生の最期

これまで波乱万丈な人生を強いられてきたお江でしたが、徳川政権が強まったことで穏やかな人生へと移行しました。特に、次期将軍である徳川家光を生んだため、お江は揺るぎない立場に君臨したのです。
そして 1626 年（寛永 3 年）、穏やかな後半生を過ごしたお江は、江戸城西の丸にて息を引き取ります。享年 54。夫の徳川秀忠より年上だったため、夫より先に旅立つことになりました。
生前、お江は土葬ではなく火葬を希望していたと言います。当時の葬儀は、一部では火葬が行なわれていましたが、全国的には土葬が一般的。特に、江戸のような人口密度が高い地域では悪臭などの問題もあったため、火葬ではなく土葬が行なわれました。

歴代将軍や正室のなかでも火葬は珍しく、ほとんど事例がありません。それにもかかわらず、江戸にいながらお江はあえて火葬を希望。その理由は、腐敗した自分の姿を夫や子に見せたくなかったためです。
お江が危篤状態の頃、夫の徳川秀忠や子の徳川家光、徳川忠長は上洛していました。どんなに急いでも、江戸に帰るまでに数日かかります。帰着後に自分のひどい姿を見せるのはあまりにも酷だと思ったお江は、姿が残らない火葬を選択したのです。

語り継がれるお江の人間性

長男である徳川家光は、生まれながらにして将軍でした。
つまり、お江に揺るぎない地位を与えたのは徳川家光と言っても過言ではありません。
しかし、徳川家光は病弱で容姿が端正ではなかったと言われています。そのため、お江は素直

に徳川家光を可愛がることができませんでした。
それに対し、次男の徳川忠長は容姿端麗で活発。徳川家光と正反対な徳川忠長を、お江はたいそう可愛がりました。
もちろん、母から受ける愛情の差が分からない徳川家光ではありません。本来は、一番大切にされるはずの長男でありながら、可愛がって貰えなかったことに落胆した徳川家光。
親でありながら子どもへの愛情に差を付けてしまったお江。それが後世の印象を悪くした一因であるとも言えます。

お江と「お福」の確執

徳川家光の乳母に任命された「お福」のちの「春日局」は、お江に代わって徳川家光に愛情を注ぎました。保育・教育のすべてを仕切っていたため、徳川家光も母より乳母に懐きます。
その傍ら、徳川秀忠・お江夫妻は次男の徳川忠長を溺愛し、徳川家光ではなく徳川忠長を世継ぎにしたいと考えていました。

あまりにも徳川家光が気の毒になったお福は、祖父である徳川家康に世継ぎを確定するよう願い出たと言います。
ただ、この段階で世継ぎは確定していません。有力なのはあくまで嫡子の徳川家光です。そのため、実の母であるお江の権力が落ちることはありません。しかし、愛情を注がないお江を、お福が快く思っていなかったのも頷けます。
こういった経緯から、生みの親と育ての親、2 人の間に多少なりとも確執があったと解釈され、ドラマなどでも度々この 2 人が対立している姿が描かれるのです。

夫の側室を認めなかったお江

現在のように一夫一妻制ではなかった当時は、正室の他に側室がいるのが一般的でした。なぜなら、1 人の女性を愛し抜くことより、多くの子を産んで家を繁栄させることが大切だったからです。そのため、政略結婚など愛のない婚姻は決して珍しくありませんでした。
しかし、お江は徳川秀忠が側室を設けることを許さなかったのです。
徳川秀忠の正室である以上、例え側室がいてもお江の方が権力は上。つまり、自分の地位が脅かされることを心配して側室を許さなかったのではなく、自尊心の高さや嫉妬深い性格ゆえのことだったと伝えられています。

ただ、徳川秀忠には浮気相手がいました。しかも、浮気相手との間に子どもを授かっています。それは、大名としてのちに江戸幕府を支える役目を担うことになる「保科正之」です。徳川秀忠は、お江が亡くなってから隠し子に会うことにしたと言われています。

このように、様々な逸話が語られるお江。どの逸話も自尊心の高さが垣間見えますが、自尊心が高いのはお江だけでなく他の姉妹にも言えることでした。「過去に権力を握っていた織田家の血が流れているからこそ見られる共通点なのではないか」という見方もあるそうです。